
殺人者のたわごと、そして微笑 その1

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者のたわごと、そして微笑 その1

【Nコード】

N4251J

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

資産家を狙った連続殺人事件が起こった。

しがないライター清田は事件について調べることになったが、偶然の出会いが彼自身の運命をも揺さぶろうとしていた。

清田は犯人を突き止めることができるのか、、、？

作：青木弘樹

登場人物

清田まこと：主人公。

下条としあき：新聞記者。清田の知り合い。

鎌倉愛梨：看護師。そして別の顔もあり。

殺人犯：????

その他数名

ある夜中。

「ぎゃあああ！」

叫び声が響いた。その数分後、血まみれの老夫婦が、目を見開いたまま、床に崩れ落ちた。

「、、、」

殺したのは、ある男性。両手に包丁を持っている。見上げるほど大きな屋敷で、その惨劇は起こった。男は金目のものを少しだけ奪い、静かにその場を去った。

翌日。

さつそくテレビや新聞で、このことは取り上げられた。ジャーナリスト、コメンテーターといわれる人たちは口々に言う。

「今回で同様の手口の事件は実に三件ですか。恐ろしいですね」

「いずれも裕福な家の人を殺害。しかし分からないのは目的ですね」

「犯人は金品を少しは奪って逃げています。しかし取るうと思えばもっとたくさんのお金や宝石を盗めたそうですね」

「ええ。中には死体のそばに数十万円の現金が置きっぱなしにして

あつたケースもあつたそうです」

「怨恨でしょうか？」

「分かりません。被害にあつた人たちに交友関係はないそうですし、ただ共通しているのはいずれも裕福な家庭だということです」

そのテレビ番組を、するどい眼光でにらみつける一人の男がいた。男の名は清田まこと。43歳。作家くずれのライター。かつてイラクに単身、取材に行ったこともある。頬に生々しい傷痕があるが、それは銃弾がかすめた痕だ。

清田はメモを取っていた。

この事件は『資産家連続殺人事件』と銘打たれていたが、今のところ犯人の特徴すら分かっていない。凶器はいずれも包丁。犯行現場からは少量の金品が盗まれている。

「いかれた男の犯行か、、、あるいは怨恨か、、、いや、男とは限らないな。最近は女も平気で人を殺しやがる、、、。金、金、金、、、何でも金か、、、」

古びたアパートの一室。清田はコーヒーを飲み干し、テレビを消した。

「しかし、、、この犯人は金には執着していないようだ。そうだな、金持ちに対して執着しているようだな、まるで、、、」

清田は立ち上がり、風呂場に向かった。

ここはある病院。

ここに勤める看護師の女性、鎌倉愛梨（25歳）は、今日も真面目に働いていた。なかなかの美人で、男性患者のファンも多い。

しかし彼女には裏の顔があつた。週二回ほど、病院から遠く離れた風俗店で働いているのだ。

風俗店での名前はリン。看護師として普段人の体のケアをしている彼女は、献身的な接客で、なかなか人気のある『泡姫』だ。店長としては週五日くらいで入ってもらいたいものだろう。

しかし彼女にはもう一つ、もつとすごい秘密があるのだが、、、それはまたいずれ、、、。

風呂から出た清田は、数時間前買ってあった週刊誌を読んでいた。清田は風俗ライターの仕事もしている。風俗嬢のインタビューをしたり、記事を書いたり、ちょっととした小遣い稼ぎだ。

生活は不規則で地味。自分で望んでそうなったのか、今ではもうよく分からないし、もうどうでもいい。

テレビに映るエセ・ジャーナリストを羨ましく思うこともたまにあるが、アングラをさまよう自分をどこかつかっこいいと思いついでいる所もあった。

清田は一時間ほど週刊誌を読んだあと、一時間ほどゲームをし、一時間ほど考え事をした後、眠りについた。

余談だが、眠ろうとしている人に対して、「よい夢を」なんて言葉をかけることがあるが、実はあれはナンセンスだ。人が夢を見ているときというのは、眠りが浅いときである。つまり夢を見ているときは熟睡できていないときなのだ。

だから本当は「夢を見ないでぐっすり眠れ」が正しい。どうでもいいうんちくだったな、、、。

次の日。

今日、清田は何の予定もない。いや毎月半分は何の予定もない。彼の収入源は、アングラ雑誌の原稿料、知り合いが勤める新聞社の手伝い、先に書いた風俗ライターの仕事、知り合いのバーをたまに手伝ったり、まあいろいろだ。

たまたま五年ほど前、親の遺産が現金で五百万ほど入ってきているが、それがなかったら今頃マグロ漁船にでも乗っているだろう。

あるいは新薬の実験のモルモットにでもなっているか、はたまたコンビ二強盗でもしているか、、、とにかく親の遺産がなかったらドツボだった。

ただ遺産が入った直後、彼は株に手を出し、さつそく百万ほど損をしていた。株なんて結局もうからない。インサイダー情報を持っている大株主なら話は別だが、、、。

昼過ぎまで寝ていた清田は、天気もいいので街をぶらついていた。駅前では、携帯電話の会社だろうか、ポケットテッシュを配る若い女性。ミニスカートからのぞく足がまぶしい。

時折、政治家らしき人の演説も見かけるが、今日はいないよいよだ。

それにしても、今は煙草の吸える場所がない。清田は駅から少し離れた場所にあるコンビニの前に来ていた。ここなら煙草が吸える。灰皿もあるし。

「ふう、、、」

清田が一息ついていると、無精ひげを生やした若い男性がゆっくり近づいてきた。

「あ、あの、、、」

男性は清田に話しかけてきた。

「あの、、、申し訳ないのですが、、、煙草を一本いただけませんか？」

男の服はよれよれだった。ホームレスか？しかしホームレスに見えるほど薄汚れてもいない。ただの失業者か、それとも流行のニートってやつか？

「、、、」

清田は一瞬迷ったが、

「どうぞ」

結局、煙草を与えた。別に断ることもない。そう、人類みな兄弟ってやつさ。

「あ、ありがとうございます」

その後、清田は黙ってライターの火をつけてあげた。

「あ、すいません、わざわざ、、、」

男は軽く会釈した。

「ふう、、、」

男は少し笑顔だった。歳はいくつくらいだろうか？自分が歳をとると、20歳のやつも30歳のやつも、あまり大して変わらなく見える。特に男は。

「君は、学生かい？」

清田は本当は、失業者か？と聞きたかったが、さすがにそれは失礼なので、やめておいた。

「いえ、、、今は、、、無職です」

「ふうん、、、」

清田は内心は、やっぱりな、と思っていた。

「あなたは、、、見た感じサラリーマンには見えませんか？」

男は鋭かった。

「俺か？俺はライターだよ。しがない落ち目なライターだ。誰も知りやしないがな」

「へえ。でもかっこいいですよね、ライターって」

「お世辞かい？」

「いえいえ、だって文才なんて誰にでもあるもんじゃないし」

「、、、」

「ほら、作家にしても、どうせ売れてるやつなんて、コネとか金とかで売れてるんでしょ？」

「まあ、、、一理はあるな」

「ね。なんでも金、金、金。金さえあれば何でも出来ますよね、今の日本は」

「、、、」

清田は驚いていた。若いのになかなかのひねくれ者だ。

「君、歳はいくつだい？」

「歳ですか？27です」

「そうか。まあ、とりあえず職安行けよ」

「、、、」

「気が向いたらでいいよ。俺も職安なんて大嫌いだしな」

「いえ、そのうち行きます」

「そっか。じゃあな」

清田はその場を去っていった。

男は煙草をかなり短くなるまで吸った後、少し考えて去っていった。

清田は男の名前は聞かなかった。興味もなかったが、なんとなく自分の名前も言いたくなかったので聞かなかった。

しかし清田はこのとき知る由もなかった。この男こそが、資産家連続殺人事件の犯人なのだ！

この出会いは偶然か、必然か、、清田にとって最大の不幸の入り口か。今はまだ分からない。

数日後。

清田は知り合いの新聞記者と晩ご飯を食べに行く約束をしていた。行きつけのラーメン屋だ。このラーメン屋の売りは味噌ラーメン。餃子もあるが、餃子はいまいちだった。やはり餃子は某チェーン店には勝てない。

個人経営だが、噂じゃお金をたんまり溜め込んでいるという話だ。また大将の娘さんが働いていて、この娘さんがすこぶる美人なため、それが目当ての客も多い。32歳で独身らしい。

清田もまともな肩書きを持っていたら、アタックしていたかもしれない。

「下さん、こんばんは」

「おう、まこと。まいど」

この下さんと呼ばれる人物、名前は下条としあき。46歳。関西人である。清田と知り合ったのはもう8年ほど前。イラクから帰ってきた清田を取材したのがきっかけだ。

「ほな、いこか」

二人は店に入った。

「いらっしゃいます〜！」

大将が、そして美人の娘さんが笑顔で迎える。二人は空いている席に座った。

「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか？」

「おう。味噌ラーメンふたつや」

「かしこまりました」

「お姉さん、相変わらず美人やなあ」

「ふふふ、ありがとうございます」

大将の娘さんは去っていった。

「なあ、まこと、いつ見てもべっぴんさんやなあ」

「そうですね」

「実はな、うちの会社の若いのが前に告白したらしいんやけどな」

「そうなんですか？」

「あっさり振られたらしいわ」

「ははは、それは残念ですね」

「美人は手強い。世の中、甘ないな」

「そうですね」

そして二十分くらいしてラーメンがやってきた。

「よしや、いただきか」

「はい」

二人はラーメンをいただいた。

「相変わらず美味しいなあ」

「そうですね」

二人は会話も忘れ、あっという間にラーメンをたいらげた。

「ふう。」「ちそうさん」

「ちそうさまです」

二人は笑顔だった。

「このラーメンはほんま美味しいから、すぐ食べてしまっなあ」

「そうですね。箸が止まりませんよ」

「あっ、お姉さん、水おかわり」

「はい。お待ちを」

二人は水を飲み、一息ついた。

「ところで下さん、例の資産家連続殺人事件、何か分かったことありますか？」

「ん？いや、特にないなあ」

「そうですか」

「なんや、まこと、あの事件に興味あるんかいな？」

「ええ、まあ」

「相変わらずぶっそんな事件に首つっこみたがるなあ」

「ははは、そんなことでもしないと飯食えないんすよ、今の俺は、

、

「そうか。わしにもうちよっと権限があったら、うちの新聞社で雇たるんやけどな」

「いえ、その気持ちだけで充分ですよ」

「まあ、何か分かったら一番に教えるさかいな」

「ありがとうございます」

「けど、あんまり危険なことはやめときや」

「、、、」

二人は店を出た。

「それじゃあ下さん、お仕事頑張って下さい」

「おう」

「俺のほうも、独自にいろいろ調べて、何か分かったら連絡します
」

「おう。ありがとうございます」

「それじゃあ」

「まこと」

「はい？」

「木下の事やったら、もういい加減気にするなよ」

「、、、」

「なんとなくやけど、お前は生き急いでるような気がする」

「下さん、、、」

「別にお前のせいじゃない。あいつの運が悪かっただけや」

「、、、はい」

「ほな、またな」

下条は去っていった。

一時間後。

家に帰った清田は、考え事をしていた。

” 木下の事は気にするな”

「、、、」

清田はまた思い出していた。あの忌々しい惨劇を、、、。

清田はイラクに二回取材に行っている。そのうち一回はひとりだが、もう一回は木下雄介というフリーのカメラマンと行ったのだ。その時、悲劇は起こった。運悪く武装勢力とアメリカ軍が衝突している場面に遭遇してしまい、木下は頭を打たれ死亡。清田は先に書いたように弾丸が頬をかすめはしたが、幸い命にかかわる怪我はなかった。

木下には結婚を約束した恋人がおり、清田はその女性の泣き崩れる姿が今でも忘れられなかった。

生き急いでいる。そう言われればそうなのかもしれない。

ひとり重い十字架を背負い生きてきた清田。

危ない事件に首をつっこみたがるのは己への罰か。それともむしろ逆で、早く死んで楽になりたいと願っているのか、、、。

どれだけ悩んでも、答えは出なかった。

その2へ続く。

(後書き)

この作品はパート1〜5で構成されております。
よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4251j/>

殺人者のたわごと、そして微笑 その1

2010年10月8日15時24分発行